



Title	日本人とインドネシア人の「断り」行動比較：談話完成テストにおける言語データに関する分析より
Author(s)	藤原, 智栄美
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 21-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本人とインドネシア人の「断り」行動比較
— 談話完成テストにおける言語データに関する分析より — *

藤原 智栄美**

キーワード：談話完成テスト(DCT)、語用的転移(プラグマティック・トランスファー)、意味公式

The purpose of this study is to investigate the manner in which invitations are refused by first-language speakers of Japanese, first-language speakers of Indonesian, with particular attention paid to Indonesian learners of Japanese. Though there have been some insightful studies of refusal by learners of Japanese (e.g. Ikoma and Shimura 1990), few have engaged in statistical analysis. Moreover, these studies have not considered the case of Indonesian learners of Japanese. The present study is an attempt to address the lack of previous scholarship in these areas.

This study focused on the following questions: 1) Are there any differences in the expression of refusal between speakers of Japanese and Indonesian? 2) How are such differences reflected in the case of Indonesian learners of Japanese? The participants in this study were as follows: 64 Japanese who are first-language speakers of Japanese (JJ); 62 Indonesians who are first-language speakers of Indonesian (II); and 37 Indonesians who are learning Japanese (IJ). Participants performed the Discourse Completion Test (DCT), the results of which were subject to statistical analysis.

Analysis of the DCT reveals significant differences in the frequency of four “semantic formulas” (Beebe et al. 1990) that are common in refusals, specifically “non-performative statements” (negative willingness / ability), “excuse / reason,” “apology,” and “address terms.” For example, this study found a discrepancy between the means that JJ and II use to convey their “intention to refuse,” in that II tend to use direct expressions of refusal more often than JJ, who tend to utilize

* Comparative Study of Japanese and Indonesian Refusals: Analysis of the Discourse Completion Test (FUJIWARA Chiemi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

more indirect expressions. Despite this underlying difference, “pragmatic transfer” (Beebe et al. 1990) did not occur in the language of IJ. Indeed, analysis shows that the manner in which IJ express refusal was closer to JJ rather than II. This implies that IJ tend to adapt to the Japanese manner of expressing refusal and are not significantly influenced by their first language.

1 本稿の目的

異文化間コミュニケーションの際にしばしば起こる問題として、話者が互いの文化において行われている言語行動のパターンを無意識に遂行し、それが相手の文化と異なる場合、両者の間で誤解の原因となったり、時には相手の人格が低く評価されてしまったりすることがある。そういった誤解を防いでいくためには、様々な場面において、ある文化の成員がどのような言語行動パターンを持っているのかを探ることが必要である。

本稿では、これまであまり焦点を当てられることのなかったインドネシア人と日本人とのコミュニケーション場面、特に誘いを断る場面に焦点を当て、日本人とインドネシア人の「断り」という言語行為のパターンを浮き彫りにしたい。具体的には、以下の点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 日本語とインドネシア語の母語場面データにおいて、「断り」行為を構成する要素の現れ方に、いかなる共通点、相違点が見られるか。
- (2) インドネシア人日本語学習者データにおいて、どのような特徴が見られるか。

2 「断り」研究における本稿の位置づけ

異なる言語文化におけるコミュニケーション行動様式の相違を調べる研究分野、また、第2言語学習者の発話行為を分析する研究分野は、それぞれ「異文化間語用論(Cross-cultural pragmatics)」、「中間言語語用論(Interlanguage pragmatics)」と言われ、日本においても1990年代以降、研究が盛んになった分野である。「断り」の研究は、様々な側面から行われてきたが、その中でも、最も大きな影響を与えたのが、Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz(1990)である。Beebe等は、断り表現を構成する「意味公式(Semantic Formula)」を提示、分類し、日本人の英語学習者の断りデータにおいて、「語用的転移(Pragmatic Transfer)¹⁾」が起きていることを指摘した。生駒・志村(1993)は、Beebe等の研究を枠組みに、アメリカ人日本語学習者の日本語データに同様の現象が見られることを確認している。また、その後も、中国語、韓国語が母語である学習者を対象とし

¹⁾ 学習者の母語からの干渉を指す。生駒・志村(1993)は、伝達上誤解を引き起こす転移を「有害なトランスファー」として指摘している。

た研究(藤森 1995、岡崎 1995 等)、マレー語を母語とする学習者の断り談話におけるポライトネスに関する習得研究(伊藤 2003)が行われる等、広がりを見せてきている。

本研究は、以下の 2 点において、これまでの「断り」研究を補うものである。第一に、方法論的補完である。これまでの研究では、一般化を行っているものの、被験者数が少なくデータの統計処理がされていないもの(例：生駒・志村 1993)が多かった。本稿では、一般化を導くために、データ収集法、その分析方法に関し、充分な数の調査対象者から集めたデータに対して統計分析を行う。第二に、これまでインドネシア人の発話行為を考察した研究はほとんどないため、本稿での分析結果は、異文化間語用論、中間言語用論という研究分野に新たな示唆を与えるものであるといえよう。

3 調査

3.1 調査対象者

日本人 64 人、インドネシア人 99 人の合計 163 人がこの調査に協力した。調査対象者は 18 歳から 39 歳までの社会人、または大学生である。調査対象者は以下の 3 種類に大別される。

- ①日本語のアンケートに答えた日本人(以下、JJ とする) …64 人
- ②インドネシア語のアンケートに答えたインドネシア人(以下、II) …62 人
- ③日本語のアンケートに答えたインドネシア人(以下、IJ) …37 人

調査者に関しては、JJ、II、IJ の 3 者間で、性別、平均年齢をできるだけそろえるよう配慮した²⁾。

IJ の日本語学習歴は、2 年から長い人で 10 年以上である。日本語能力に関しては、日本語能力試験に合格しているか否かを以下の表にまとめた。

表1 IJ の日本語能力(日本語能力試験に合格しているか否か³⁾)

4 級合格	3 級合格	2 級合格	1 級合格	記述なし
2 名(5.4%)	19 名(51.4%)	10 名(27.0%)	3 名(8.1%)	3 名(8.1%)

²⁾ 性別の割合は、男性に関しては、JJ、II、IJ の順に 20%、24%、27%、女性は 80%、76%、54% (IJ の残りの 19%は不明) である。平均年齢は、JJ が 20.7 歳、II が 24.6 歳、IJ は 25.7 歳となっている。

³⁾ データ収集の面から、学習者の日本語能力に開きがでた。本稿では、能力別の相違に関しては分析の対象から除外する。

3.2 データ

本研究では、2002年6月から7月にかけて、インドネシア(主にジャカルタ)と日本(主に関西)において、断りに関する談話完成テスト(Discourse Completion Test; 以下、DCTとする)を行った。DCTをデータ収集法として選んだ理由は、本研究が「日本人とインドネシア人の断りに関する言語パターンの相違を明らかにする」という一般化を目的とした研究で、それを導く量的分析にDCTが合っていると考えたためである。DCTにおける断り場面は全部で12場面から構成され⁴⁾(地位が上、同等、下の相手に対して誘い、依頼、申し出、提案を断る場面から成る)、調査協力者には設定された場面において、談話中のブランクを全て断り表現で埋めてもらった。本稿では、このうち誘いを断る場面を取り上げ、分析する。

<場面1>上司から、パーティに誘われる。(地位的関係が上の相手に断る)

<場面2>学生から、食事(インドネシア語のアンケートでは映画)に誘われる。
(地位的関係が下の相手に断る)

<場面3>仲のよい友人から、食事に誘われる。(地位的関係が同等の相手に断る)

分析データは、JJデータ191場面、IIデータ185場面、IJデータ109場面の計485場面である。

3.3 データ分析

本稿では、先行研究⁵⁾と今回のDCTデータにおいて断り談話を構成している要素を基に、誘いに対する断り談話を構成する意味公式(semantic formula)を以下のように設定した。

●「誘いに対する断り」を構成する意味公式⁶⁾

1. 直接的断り

- | | |
|-----------------|-----------------------------------|
| A) 遂行的陳述 | 例: お断りします ⁷⁾ |
| B) 非遂行的陳述(不可表現) | 例: 行けません / Saya tidak bisa(～できない) |

⁴⁾ 場面の選定に関しては、Beebe et al. (1990)のDCTを参考にしたが、明らかに日本とインドネシア文化でありえないと思われる場面(例: 社員が上司に給料の値上げを要求する場面)に関しては、設定を変更した。

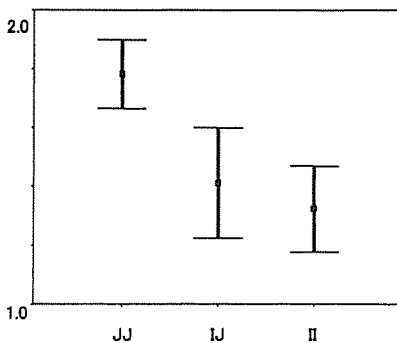
⁵⁾ Beebe et al. (1990)、Nelson et al. (2002)の意味公式を参考にした。インドネシア語の日本語訳がないものは、日本語と同義である。

⁶⁾ Beebe等の研究では、意味公式を直接的断りと間接的断り、断りに付随する要素(Adjuncts)の3つに分けているが、本稿では、Adjunctsを断りの間接的ストラテジーに含めた。これは、Beebeらのカテゴリー分けでいうAdjunctsの一部が、日本語ではしばしば間接的断りとして機能することがある(例: 「有難いんですが」)と思われるためである。

⁷⁾ インドネシア語データには現れなかったため、日本語例のみを示す。

検定で明らかになるのは3者間のいずれかに有意差があるかどうかのみで、3者がどのような関係にあり、どこに有意差が存在するかという点に関しては明らかにすることができない。そのため、分析の次の段階として、検定によって有意差が判明した意味公式に関しては、JJ、II、IJの値をエラーバー¹¹⁾で表示した。エラーバーを表示することで、母集団における平均値の区間推定を知ることができる。本研究では、信頼係数を95%に設定しており、JJ、II、JIの平均値が表示されている範囲内に95%の確率で収まるということになる¹²⁾。つまり、中間言語であるIJの日本語が、日本語母語話者であるJJの日本語、学習者の母語であるインドネシア語の出現頻度パターンとどのような関係にあるかをエラーバーで表示することにより、先行研究で検証されてきた「語用的転移」以外の現象をとらえることが可能になるのである。3者間で相違が存在する場合、エラーバーの表れ方には、いくつかのパターンが存在する。本稿では、分析の枠組みとして、分析の結果出てくる可能性のあるエラーバーのパターンを大きく3つに分け、「語用的転移型」、「アコモデーション型」、「学習者突出型」とする。以下、各型のエラーバーを示し、各型に関する説明を加えたい。

< I型 > 「語用的転移型」



左図は、IJとIIに重なりがあり、JJとは重なりがない。この図は、IJとIIに有意差がなく、それら二つとJJに有意差があることを表している。つまり、IJは明らかにIIの言語使用様式に近くなっており、母語であるインドネシア語の干渉である「語用的転移」を示しているといえる。

< II型 > 「アコモデーション型」

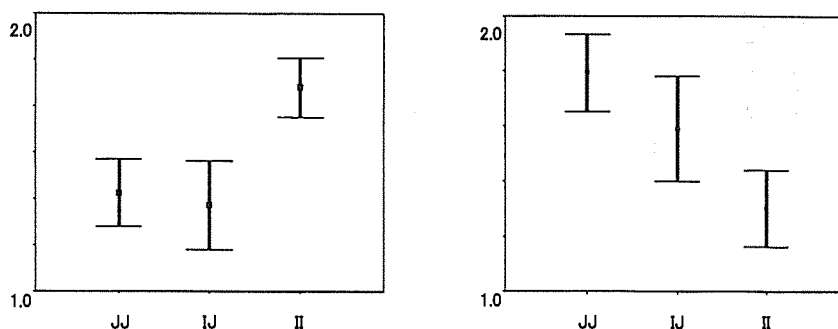
本稿において、下の二つの型を「アコモデーション型」とする。母語での様式を用いる「語用的転移」に対し、「アコモデーション」¹³⁾は、母語であるインドネシア語より目

¹¹⁾ 推定平均値の範囲をグラフで表したもの。例えば、今回の調査では、JJは64名であるが、エラーバーによって、母集団である「日本人の日本語」全体の区間推定値を知ることができる。本研究では、信頼係数を95%に設定しており、「日本人の日本語」の平均値が、表示されている範囲内に95%の確率で収まることになる。

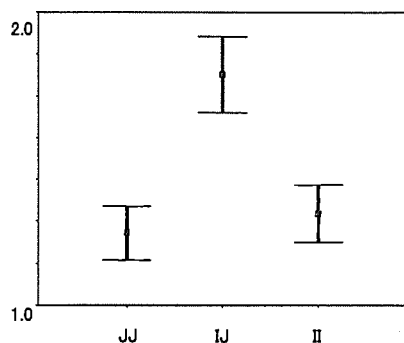
¹²⁾ これらのエラーバーを使った分析に関しては松尾(2003)を援用した。

¹³⁾ 「アコモデーション」は、聞き手の話し方に合わせる言語使用の様式であると定義できる。Thakerar et al. (1982) は、話し手個人の自分の言語行動に対する主観的意識と客観的に測る言語行動という観点から、「客観的コンバージェンス」、「主観的コンバージェンス」に分けているが、本稿で扱う「アコモデーション」は、Thakerar et al. (1982)の言う客観的コンバージェンスのことを指す。

標言語話者である日本語母語話者の使用により近くなる学習者の中間言語使用パターンである。下の左図は、II と JJ、IJ 2 者との間に有意差があることを示す。この型において IJ は JJ の言語使用パターンに近づいている「アコモデーション」を示している。右の図では、JJ と II が異なる言語使用パターンを有し、IJ はやはり JJ のパターンに近づいている。本稿では、II の言語使用を基点とし、そこから JJ に寄っている IJ の言語使用パターンも一つの「アコモデーション」として捉える立場を取る。



< III型 > 「学習者突出型」



III型は、JJ と II 間で有意差がなく、日本語学習者である IJ の言語使用が他の二つと異なっているパターンである。これらは、母語には見られない意味公式の使用パターンを表しており、学習者独自の特徴が現れている型であるといえる。

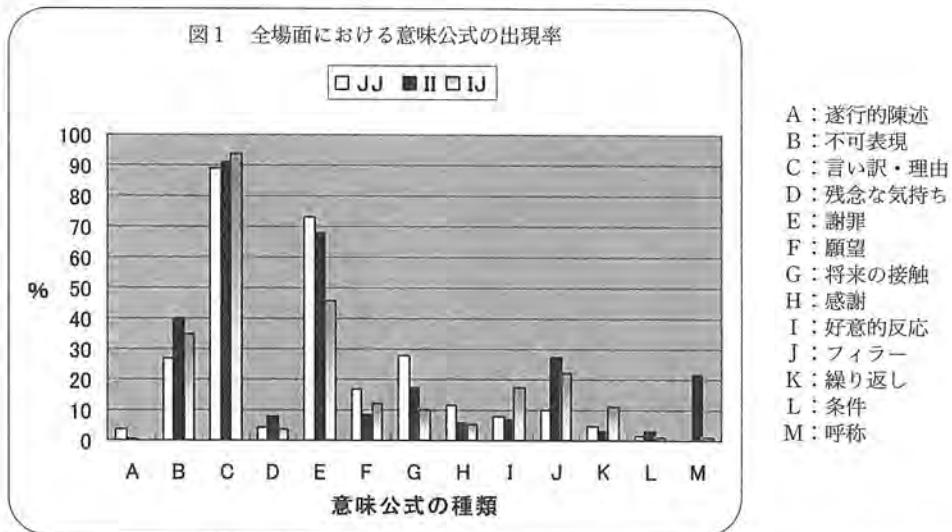
分析においては、それぞれの意味公式において、3者間の有意差がどのパターンとなるのかを明らかにする。

4 分析結果と考察

4.1 意味公式の出現率

図1は、DCT分析によって得られた全場面におけるJJ、II、IJに関する意味公式の出現率を示したものである。3者間で共通しているのは、最も多く現れた要素が、意味公式C「言い訳・理由」(JJ-89.1%, II-90.1%, IJ-93.6%)、意味公式E「謝罪」(JJ-72.9%, II-68.1%, IJ-45.9%)の順となっていることである。

以下、JJ、II、IJの各意味公式の値に対して、有意水準を5%としてKruskal-Wallis検



定を行った結果を示す。表2は、各意味公式に関し、検定から有意差が得られたかどうかを示したものである。有意差が得られた意味公式のうち、本稿では、有意差が存在する意味公式の中から、出現頻度が高く、差が顕著で両言語の特徴が色濃く出ていると思われる4つの意味公式に焦点を当て、さらに詳しく分析する。本稿では、意味公式B「非遂行的陳述（不可表現）」、意味公式C「言い訳・理由」（明確な言い訳、曖昧な言い訳に区分）、意味公式E「謝罪」、意味公式Mの「呼称」を取り上げる。

表2 「誘い」に関する Kruskal Wallis 検定の結果

有意差あり (p<0.05)	有意差なし
遂行的陳述、不可表現、言い訳・理由(明確な言い訳・曖昧な言い訳) 謝罪、将来の接触、フィラー、呼称	残念な気持ち、願望、感謝、肯定的表現、繰り返し、条件

4.2 各意味公式の頻度・内容に関する分析結果

4.2.1 意味公式B「非遂行的陳述（不可表現）」

図2は、直接的断りである「非遂行的陳述(不可表現)」の結果をエラーバーで表示したものである。縦軸は、「1＝使用している」で「2＝使用していない」である。エラーバーが重なっていれば、統計的に有意差があるとは言えず、重なっていなければ有意差があるということになる。

図2を見ると、JJとIIは重なりがない一方、IJは双方と重なっている。このグラフより、IIはJJと比べ、誘いを受け入れられないことを明確に否定する傾向があることが窺える。また、IJの値は、JJ、IIのいずれとも重なりがあり「アコモデーション型」に

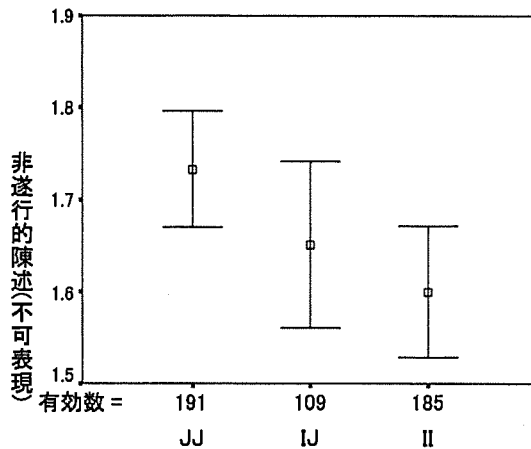


図2 非遂行的陳述(不可表現)

なっている。しかし、JJとIIとの間に有意差があるという結果は、日本人の断りがインドネシア人にとって曖昧で分かりにくい、或いはインドネシア人の断りが日本人にとって、はっきりしすぎているという異文化間コミュニケーション上の誤解の原因となる可能性を示唆していると言えるのではないだろうか¹⁴⁾。

4.2.2 意味公式C「言い訳・理由」

言い訳の内容に関しては、Beebe et al. (1990)において、アメリカ人がどこで誰と何をするかをはっきりと述べる明確なものであったのに対し、日本人は「用事があります」「ちょっと忙しい」等のように曖昧なものが多かったことが報告されている。そこで、本研究においても、言い訳を明確なもの、曖昧なものに分類し、分析した結果、次のような数値が得られた。

図3をみると、IIの方がJJよりも明確な言い訳を使用する頻度が高くなっており、IJはJJともIIとも重なっているため、いずれとも有意差がないといえる。一方、図4においては、インドネシア人がインドネシア語で断るときには曖昧な言い訳を使用する頻度が相対的に非常に低い。JJとIJは重なっていて、IIとは有意に異なる。これは、本稿の3.3で述べた「アコモデーション型」に相当するものである。つまり、インドネシア人日本語学習者のデータに現れているのは、語用的転移ではなく、日本人の断り方にスタイルを合わせている「アコモデーション」であると考えられる。

¹⁴⁾ 飯野他(2000:111)は、不可表現の直接性に関する相違(例:「行けません」等)が異文化間コミュニケーションにおける誤解に結びつく可能性があることを指摘し、特に疎の関係にある対話者同士の異文化間コミュニケーション場面においては、「行けません」といった不可表現等の直接的表現を用いるより「もう少し柔らかく断ったほうがスムーズな人間関係を保つことができる」と述べている。

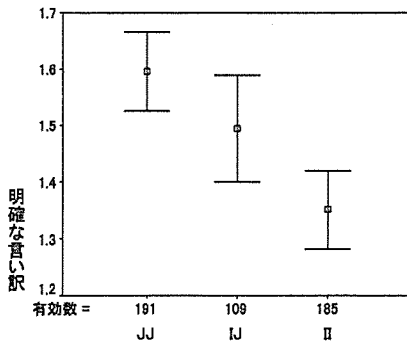


図3 明確な言い訳

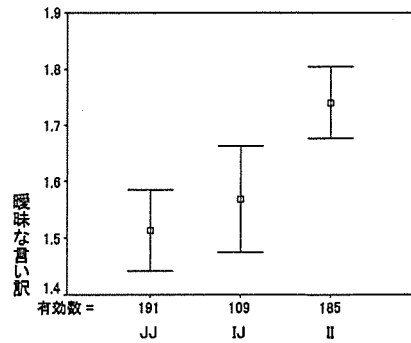


図4 曖昧な言い訳

4.2.3 意味公式 E「謝罪」

4.1で述べたように、JJは72.9%、IIは68.1%と非常に高い割合で謝罪表明が行われているのに対し、IJは45.9%と半数以下となっている。エラーバーを表示したところ、JJ、II間に有意差はないが、IJのみが他の2つと異なるというIII型「学習者突出型」となった。このような結果が得られた一つの可能性としては、「断り」から生じる人間関係

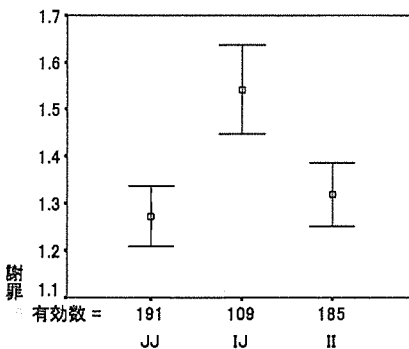


図5 謝罪

のダメージに対する一つの補償行為として考えられる「謝罪」の意味公式の使用が、母語使用時より第2言語である日本語使用時に於いて、少なくなってしまうということが考えられる。しかし、これを結論とするには、他の場面における補償行為や、補償行為として機能する他の意味公式についても深く分析し、母語話者、学習者の行う断りの補償行為方法の解明を行うことが必要である。今後の課題としたい。

4.2.4 意味公式 M「呼称」

日本語とインドネシア語で相違が特徴的だった意味公式の一つに「呼称」の使用があ

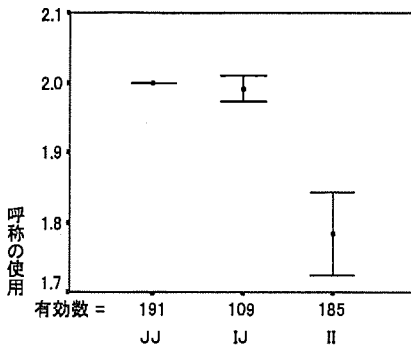


図6 呼称の使用

げられる。図をIIの呼称の使用率は、JJ、IJに比べて高くなっているのが分かる。これは、上司の誘いを断る場面2において顕著に見られた特徴である。インドネシア語では、相手に対する丁寧さを表す手段として、呼称を使う傾向がある。これは、呼び掛けることで相手との心的距離を縮めたいという意図の表れ

であるといえる。しかし、日本語でのデータにおいては、一切現れなかった。インドネシア人日本語学習者は、普段のインドネシア語では、呼称を使用しているとしても、日本語となった場合、その使用様式が日本語に近づいていることを示していると言えるだろう。

5 まとめと今後の課題

今回の分析結果より、IIはJJと比べ、断る際、より明確に理由を述べ、不可表現を用いる傾向があった。つまり、両者の断り方の方策において、直接性、間接性に関する相違が存在することが明らかになったといえる。また、インドネシア人日本語学習者のデータには、語用的転移という現象よりむしろ日本人に対するアコモデーションが起こっていることが観察された。今回のデータに現れているのは、インドネシア人日本語話者であるIJが、常に母語の影響下にさらされた受動的な話者ではなく、その言語を話す話者がいかなるコミュニケーション行動をとるのかということに対する自身の知識を駆使しながら、能動的に言語行動様式を選択している話者としての一側面であるといえよう。

今後の課題として、2点挙げたい。第1の課題として、今後、より分析を深めるため、各意味公式の順序、組み合わせに関する分析を行いたい。今回は、意味公式の頻度、内容の分析に焦点を当てたが、意味公式を単独で用いる場合と他の意味公式と組み合わせる場合とでは「断り」の伝わり方に相違が生まれる可能性もあると思われる。よって、断りの意図を伝達する際、どの意味公式が最初に現れる傾向があるのか、そこにパターンが存在するのか、また、ある意味公式がどの意味公式と共に用いられる傾向があるのかを明らかにしていく必要があるだろう。第2の課題は、データ収集法、分析場面を拡げていくことである。今回のデータは、DCTのみの分析であった。DCTは、断りに対する言語話者の意識の現れ方を量的に分析するという点において有効ではあるが、談話の流れとしての断りを捉えられないという問題点がある。よって、DCTに加え、Role Play、自然談話等のデータ収集法を採用することで、談話の流れとしての断り行為を分析することが必要であろう。今後、このような方法論の改善を行いながら、分析対象とする場面（例えば依頼、申し出、提案等に対する断り場面）を広げていくことで、日本人とインドネシア人のコミュニケーション場面をより深く考察していきたい。

主要参考文献

- 飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子(2003)『新世代の言語学』くろしお出版
生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：
『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号 41-52

- 伊藤恵美子(2002) 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について—勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系のプミプトラのポライトネス」『日本語教育』115号 61-70
- 岡崎 眸(1995)「日本語学習者における語用論上の転移再考」『東京外国語大学論集』第50号 97-109
- 藤森弘子(1995) 「日本語学習者に見られる『弁明』意味公式の形式と使用 —中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87号 79-90
- 松尾 慎(2003)「インドネシア華人社会における言語シフトと言語選択」大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文
- ラオハプラナキット・カノックワン(1997)「日本語学習者に見られる『断り』の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7号 97-112
- Austin, J.L. (1962). *How to do things with words*. Oxford University Press.
[坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978]
- Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language*, (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Brown P. and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gass, S., & Houck, N. (1999). *Interlanguage refusals*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kasper, G. (2000). Data collection in pragmatics research. In H. Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking*, (pp.316-341). London: Continuum
- Kasper, G., & Blum-kulka, S. (Eds.). (1993). *Interlanguage pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Nelson, G.L., Carson, J., Al Batal, M., & El Bakaly, W. (2002). Cross-cultural pragmatics: Strategy use in Egyptian Arabic and American English refusals. *Applied Linguistics*, 23/2, 163-189.
- Thakerar, J.N., Giles, H., & Cheshire, J. (1982). Psychological and linguistic parameters of speech accommodation theory. In Fraser, C. & Scherer, K. R. (Eds.), *Advances in the Social Psychological of Language*, (pp.205-255). Cambridge University Press
- Turnbull, W. (2001). An appraisal of pragmatic elicitation techniques for the social psychological study of talk: The case of request refusals, *Pragmatics* 11/1,

31-61.